

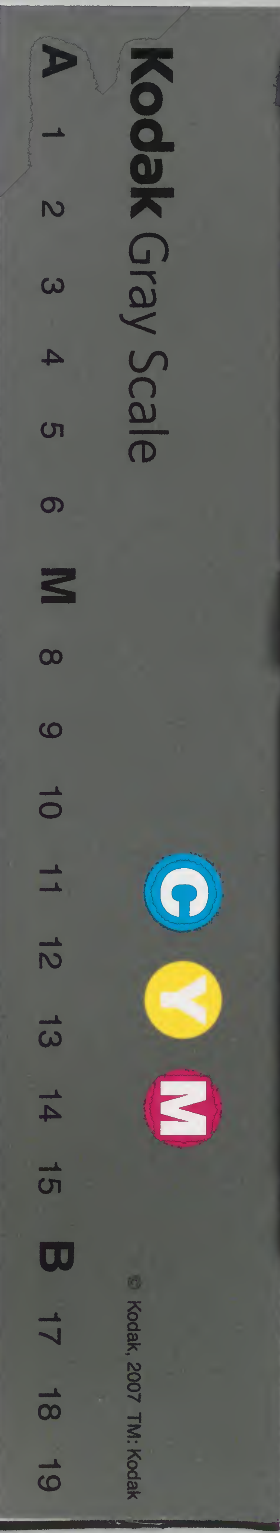
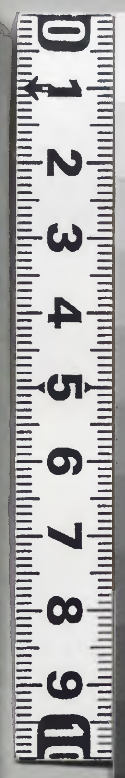
南嶺子

和書門			
一	八	八	八
二	七	八	八
三	八	八	八
四	〇	八	八
冊	架	函	號類

內閣文庫	
二	一八七八
函	冊
一	架
架	冊號類

(二九)

內閣文庫	
番號	和 18788
冊數	4 ( 2 )
函號	212 2



南嶺子卷之二

秋齋桂先生著

門人

山中秀蕃 松尾守義 同校

○今の儒者やも、（印） 彼大日本の大道と謂ふ。仏者ハ亦大日本の前代と信託し、（印） 神道者流と云ふ。神奈の如実と云ふ。前

聖の道と云ふ。其の禮也。禮なくして、何の乃と云ふ。信者ハ周の

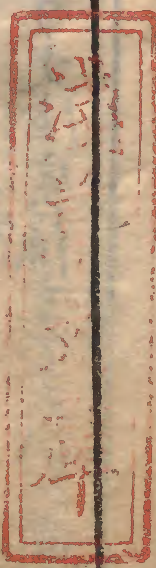
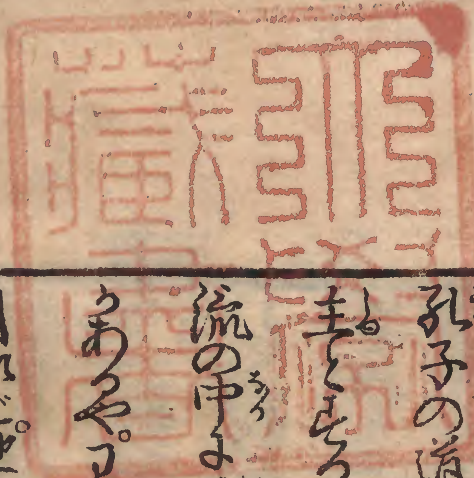
孔子の道よのこころ。学者と歴史文章此より情を用ひ。仏者もこの

主と云ふ。釋迦彌陀あり。他を謗他と云ふ。此及ぶ。近世の神道者

流の中より、卑さる。信を翻し、雜云。悪まや。人の情も、情の益

ある。其主と云ふ。大日本の太古の風を、國史格式考と。故に、其を

用ひて、他と顧らば、其のあつた。此の學ぶべき。其推し、他の教を、誠



とらふことまじく道の学びざる所より物と知べし

○詔大日本と神國とするの國常立尊以来御統易らば。あつ  
 と。初天皇氏より地皇氏より。又人皇氏より。堯は九男二女  
 あれた舜は讓つて。舜も三子は禪けして禹は讓つ。是より夏殷周の  
 三代姓を殊め。秦漢より次第よりかちりて北狄入て天子を稱するに  
 至る。是れあちやんときと。詔大日本は天皇氏のみよて萬世不易とな  
 るべしんを。天子と天皇とわがれより。萬葉集も。天子の御事と推神と  
 より。公式令も。以大事宣於蕃國使詔書大明神御宇日本  
 天皇詔旨と云ふなり。今日天子と云ふ神とわがれ奉るの文をるを  
 知べし。初れは神皇といふ。日本書紀より文徳實錄まで五部の國史

みは乃び。三代實錄よ至て。抄せしなり。第十七貞觀十二年二月十五日  
 告文曰我朝乃神國。憚良祀來。祀田故實。○貞觀十二年十二  
 月遣使者於伊勢大神宮告文曰日本朝。彼所謂神明之國。奈利  
 云。是より後の書は神皇の字けくせり。昔ハ神皇といふ及ぶる程  
 なく。裴淵より知れり。号はれた。倭仙の字も。是より後。是れは對  
 してお混ざりぬ。清和天皇以来神皇といふ号と張とるなり  
 ○神武天皇より後を人代とす。人皇とす。神代の終を務草不  
 菅合さる。神武天皇とす。所子なくす。はま。神武天皇のれ  
 ば。是も神代の人とのりてある。是より。神代是より後ハ人代を。倭  
 よか。日本書紀も。太祖國常立尊より。伊弉諾尊

南嶺子 卷二

傳と指して是謂神世七代者也。書れり。俗よは是と天神七代と  
 おぼく。天照太神より以後と。地神五代と。皇の御代古書よなき事少て。  
 天神地祇といふと各別の子なり古と相違集の序と紀貫之の序も  
 ちとちと神代といふものどもは。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。  
 人の子とて。すとのみと。みと。みと。みと。みと。みと。みと。みと。みと。  
 といふ。是伊弉諾と。神世と。神代と。天照太神より  
 ハ禮も粗と。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。  
 瓊々杵と。彦火と。出石と。稻草と。不韋と。三代日向と。初めは。世ハ  
 文物の。質朴の。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。  
 神武天皇を東に國ありと。知れり。軍勢と。修。大和に入

むと。いづれか。朝敵長髓彦が射ち。箭よ。天皇の弟。五瀬命。あこ  
 ら。世の。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。  
 と。いづれか。英氣と。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。  
 といふ。今日の人情と。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。  
 世といふ事。いづれか。王。唐。油。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。  
 傳を。人王。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。  
 其後の書。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。

博楽と。上古よりの。續日本紀。文武天皇元年丁酉七月  
 乙丑。文曰。禁博。戲遊。手之後。其居。停主人。亦。居。同。衆。日本  
 紀。略。第一。延喜五年七月廿八日。文曰。今日。内舍。人大。踰。夏。真。配。流。

又捕博戲之輩云。○雙六樗蒲と博戲して罪を犯す。捕  
 亡令。雜律及天平勝寶六年の官符より。角方と用らる  
 らば。雙六は屬。たは延喜彈正式日雙六者不論。尚下一切  
 禁断。色は耽もの。利は志は。老て改る。持亦と初る  
 利より。て。老益は。や。時。情。利。時  
 あり。人。利。あり。其。利。を。情。意。増。長。して。盜。賊。公。事  
 つ。り。分。け。し。百。錢。の。下。の。猪。肉。も。十。令。万。令。の。争。ひ。も。其。地。一  
 ち。り。を。と。中。ら。れ。た。毒。魚。と。題。や。河。豚。を。食。し。る。の。罰  
 ち。り。と。樗。蒲。ヲ。弄。し。法。を。忘。れ。筋。と。顧。ぢ。々。獸。肉。と。食。して。  
 社。は。し。む。よ。う。ハ。様。悪。甚。し。く。親。子。兄。弟。も。も。を。猪。鬚。を

ち。て。ハ。持。其。の。心。よ。う。く。は。是。より。不。孝。不。弟。の。情。の。原。と。なり。つ。お  
 一。人。倫。の。道。を。と。り。ま。す。り。と。ち。り。も。あ。の。人。を。忌。む。盜。賊。と。あ。り。と。知  
 る。べ。し。子。が。子。孫。も。し。是。と。好。ま。ず。も。な。り。と。ち。り。も。あ。の。人。を。忌。む。つ  
 あり。と。子。孫。の。子。孫。も。あ。ら。ば。僧。尼。令。と。名。れ。ば。僧。尼。作。音。樂  
 及。博。戲。者。謂。及。六。樗。蒲。之。類。也。百。日。苦。使。基。琴。不。在。制。限。と。の。せ。れ。り。其。六  
 持。亦。よ。う。く。は。今。の。僧。某。寺。其。院。等。の。法。り。よ。音。樂。と  
 有。り。ひ。て。罪。人。と。す。傍。侶。の。所。り。ひ。ひ。け。あり。た。大。日。本  
 み。任。て。大。日。本。の。社。実。と。名。を。彼。禮。を。蔑。如。よ。う。の。域。よ。う。の。下。  
 樂。人。あり。て。官。寺。の。法。樂。と。古。より。あり。ま。れ。る。僧。侶。れ。ひ。て  
 傍。に。令。よ。度。ら。佛。説。よ。其。國。を。ま。す。其。心。の。た。ま。を。ひ。け。の

志ありありやいふ

六十

○詔大日本の神國といふありあり日本書紀孝德天皇大化元年七月文曰巨勢德太大臣詔於高麗使曰明神御宇日本天皇詔旨天皇所遣之使與高麗神子奉遣之使既往短而將來長是故可以溫和之心相繼而往來而已○續日本紀延暦九年七月左中辨正五位上兼木頭百濟王仁貞卒上所表曰本系出自百濟國貴須王貴須王者百濟始祖第十六世王也夫百濟太祖郁慕大王者日神降靈奄扶餘而開國と云々孝德天皇の詔旨も高麗神子とあり百濟王等の表文も日神降靈と書つたので知る漢土の人夷狄の風はゆるそと云ふはのりと神別と秘の唐僧義淨天竺

少く著し西の寄帰傳少も唐のりと始終神別と云ふ天竺の教を信する僧がよぶがよと云ふはのり況や大日本系よりの神もあふおとくも儒者をも侮む漢土と中華と云ふやまひ佛者あはむを粟散多土なむと云ふ詔大日本の地は信し大日本の五穀と次生命と保林示と侵禮と云ふ其長其蔽大なるが佛經は天竺と際限もあつた大國の形もあつた星辰を以て地を量るの程あり義淨三藏渡天して云ふのりも五天竺を悉記する子楊柳の本形と云ふてふをさゆくも推考す大日本は春ま一人大日本の地と云うて深山幽谷まぐの木の奇をと被るは中くづの年報と云ふかあふべし唯唯巡行するやと云ふ事と云ふを云ふり方便説を以

實地の御となくさうぶ

七十

○菽也者物なりと庸醫も功者ありといふ諺を思ひ  
 一冊。予尾張より時名古屋より津島へ往て海東郡とあり  
 一冊。河阪手あるいふ處に菽の中皿壺を賣ては朱の瓜茄の買  
 入の目録を納むるを考むれば菽と瓜茄と瓜茄と瓜茄と瓜茄と  
 加へ毎年拾月廿五日熱田社の標拂と二月初午日の神供は菽に  
 あり然れども其數も亦く記されぬ。其利のむりも略しれば考むるに  
 するものぞ。るるも。私のおのり。近代の神代  
 流神古の事記すに推しのまて舊記正史よ本ざらぬ實と考むるに  
 べ

八十

○兼好々神祇官の龜卜の家より長明を御祖大社の神家の  
 子形也。出家してわがものごとく風流の方より看ん。一家の  
 酒流れも一やもいふべし。其家系より看ん。先祖救世の業と名  
 する振も。父社の不孝といつてさげすむ人も才智群も秀しんを  
 む。くわが家の業をとうむめをていと。おふは付ていふべし。  
 長明とはしるの傍に如く知を。方丈記にもあるなり。兼好と後  
 宇多院崩御の時出家とあるを。おふは付ていふべし。伊賀下り  
 守守橋成忠  
 小や。其は年も。成忠の妹中宮小舟を愛ひ。  
 伊賀と追出され。その成忠傍ある人少く。又よびを。やういふ。  
 けは。別を菴と建て。小舟の通路も。送す。時○。又

こころの送りぬね。ちかぬあゝとんををかれ。とちまなり。あゝはしん  
 園大曆めのもころ。その上げれく。弟風流の書。これ。文面より自慢  
 あゝそれ。が才と。餘る。意多し。彼書より。後念の海より。かきとらふ  
 魚と。出して。人々。是と。念の。まづ。と。振。書。なり。延喜式より。堅魚を  
 供所。よの。也。萬葉集。より。と。初。たい。初。く。よ。や。と。食。早。よ。あ。て。び。て。は。ね。や。  
 ころ。ころ。つ。終。の。う。ら。あ。げ。て。ぞ。や。す。東。醫。寶。鑑。よ。松。魚。と。の。せ。ち。あ。の。の  
 び。と。し。ね。書。を。ね。ぞ。ん。ぞ。も。あ。ん。ん。予。羨。好。よ。恨。を。け。ね。と。い。わ。い。ん。や。  
 け。き。く。弟。を。そ。し。う。あ。る。書。と。兒。女。の。謔。ら。ん。ぞ。と。き。れ。辨。ぬ。本。寺  
 とも。い。ろ。く。任。傍。が。還。俗。し。て。神。人。と。あ。す。と。其。一。流。の。僧。善。し。と。ん。や。  
 長。明。と。好。と。神。家。より。祝。ん。と。亦。還。俗。の。傍。を。寺。院。の。徒。の。祝。ん。ぞ。

同義なり

○あゝと。と。む。む。や。短。宗。の。人。お。か。い。し。を。さ。す。れ。か。ら。と。は。ご。り。と。云  
 る。世。の。ま。つ。く。ころ。か。なり。よ。尾。張。の。方。お。く。い。ね。つ。ご。ら。と。稱。し。て。む。の。ゆ。く  
 ち。ご。や。な。る。人。は。さ。か。し。れ。ね。が。さ。つ。う。と。り。の。あ。り。ね。ぞ。う。う。い。か。あ。し。の。の  
 い。の。形。う。ち。ふ。う。ろ。て。人。の。せ。の。よ。あ。る。の。本。末。を。あ。ら。わ。せ。ん。と。う。保。が。ら。か  
 その。せ。ふ。ね。と。祝。傍。の。寺。に。立。春。大。吉。祥。と。く。い。ま。さ。つ。う。立。春。大。吉。の  
 四字。ハ。裏。より。を。て。も。い。へ。る。邪。鬼。う。う。あ。り。て。入。る。も。お。し。ぬ。う。い。ん。を。  
 ま。ど。あ。し。よ。あ。べ。迷。故。三。界。城。と。は。ま。い。り。て。は。ま。不。定。目。と。お。き。く。厲  
 多。し。不。成。日。を。い。じ。ん。も。寝。を。あ。そ。な。を。今。日。を。不。成。日。と。い。ふ。め。が。ま。  
 古。書。小。不。成。日。の。ゆ。え。に。況。や。大。不。成。日。の。日。は。放。て。と。や。



○世あ相者といふ者あり。其傳一流多岐。愚民の是み惑をさるるあり  
 さんを開くは禪傍ましく是を憑て吉凶を苦樂に癡人論むるも  
 是のいふは是も亦巫覡に属し下。漢土より渡り相書多許はと  
 凡よ迂遠附合よき人の月なき事あり。説文曰古之神聖人母  
 感天而生子。春秋元命苞曰女登生子人面龍顏始為天子。○史記  
 周本紀正義曰帝王世紀曰文王龍顏也。○漢高祖本記曰龍  
 顔とあり。顔の字。増句み額角曰顔と註し。山の至高なる處と山嶺  
 と稱し額と額と此の國語よ天威不遠顔咫尺眉目の際  
 を顔と稱する也。説文よのせり。我れといふは信よ即ち其むしり。  
 眉目の際よ天子とあり。天子とあり。天子とあり。天子とあり。天子とあり。

の象といふよりなる。太古よりなるもあはれ。龍ははるハ  
 天子の相あり。あなとあり。今の相者或る人の面と二十六禽あ  
 けり。虎は似る。虎の性を以一生と記。角は似る。角の際  
 ある竹を一代あり。説類半猫半角とて類と猫は尾を以是事と  
 猶あり。説向後のり。角あり。説又々福壽貧大の四十二相を  
 圖す。ものありて。是を考るあり。皆不替妄談ありて。是を  
 かく。氣さうとれ合ぐ。かくは是る。家大日本子相は法別あはれを  
 こそ。源氏物語相壺まよる。兼人の相の介よ。やは相く。いふ。是  
 あり。是を説。是のあひ。方相極とて。そのお。根の子細を言ふ。あ  
 り。して。い。ま。つ。ま。なる。あり。今の相者といふ。このま。あ。り。て。い。て。

その見まけり子細かたげば明雲たさのまねやいふるあふと。その  
 天台のたさ少くいふとあふあふううぬるの始なり。明は日月ありて  
 その下は雲あれを光とさるれいけん信西樹しやれぬ。手家お預  
 子見へり。天智天皇元年四月。鼠産於馬尾。いあるゆあやと道野とい  
 信ふ占せあふ。北國の人まに南國は所んふ家の兆なり。吉藤破れく  
 日本は属んく占り。鼠と小方のふは取馬と南方の年ま比して  
 占るものあて。それまても甚まけぬなり。今の占者相考と殊あるを  
 ○聖德太子と高天日本。佛法と弘く始なり。世よぶる子と  
 南岳も思禪師の再せたりと。信ふ宋言傳傳。信燈流をくもの。思  
 思禪師倭國王とたり也と云ふ。宋史まびく。隋の時日本國用明王

一四

二七

の子雲中と飛り。前けの法華經を取ゆ。南岳の後身なる也を  
 載り續高僧傳。唐の玄宗の時。空と真和尚。或人問て。南岳  
 惠思禪師。再世倭必まとなる。有やといひ。するんす。やうの  
 少くやも信ふ。禪師の入室よりあふ。降誕の事。佛祖統紀と  
 日本書紀を合と看ぶ。聖法を諱ありと神皇正統紀よあれ。北  
 北島大納言の々の誤なり。今集解。謚号なるもの。○遊女の  
 既漢有遊女と詩經。ようひ。亦大日本。の古来より  
 市。市中。邑里。あり。さるの。あ。船のや。る。あ。よ  
 群して。旅客を慰は。む。ハ。口。井。法。解。法。を。く。無。昌。一。ら。を。  
 三善為康所録。朝野群載。分三。遊女の記。一篇あり。其の文を

のそ其世の古きと云ふの○自山城國與度津浮巨川西行一曰謂  
之河陽ヤマトノワケ也山陽南海西海二道之者莫不遵此道モトメ江河南北村  
邑處々分テ向河内國謂之江口カヘ蓋典藥寮味原牧掃部寮大庭  
莊也到提津國有神崎蟹島等地比門連戶人家無絕倡女成  
群棹扁舟ヒナフネ着旅船以席枕席聲過漢雲韻飄水風經迴之人莫  
不忘家列本ノミ盧浪尤釣翁高宮舳艦相連殆如無水蓋天下第一之  
樂地也江口則觀音為祖中君小馬白女主殿蟹島則宮城為宗  
如意香爐孔雀立牧神崎則河菰姫為長者孤菰宮子力命小  
兒之屬皆是俱尸羅之再誕衣通姬之後身也上自卿相下及黎  
庶莫不接林芻施慈愛又為人妻妾歿身被寵雖賢人君子

不免此行南則住吉西則廣田以之為祈禦壁之處殊事白大夫泊祖  
神之一名也人別刻之數及百十能蕩人心亦土風而長保年中東三條  
院ヤマト希詣住吉社天王寺此時禪定大相國被寵小觀音長元年中上東門  
院又有御幸此時宇治大相國被賞中君延久年中後三條院同幸  
此寺社柏犬イヌ憶等之類並舟而來人謂神化近代之勝事也相傳  
曰雲客風人為賞遊女自京洛向河陽之時愛江口人刺史以下  
自西國入河之輩愛神崎人皆以始見為事之故也下文長  
の遊女ハ貴族の寵もありけり後泊のちびりのそりて  
後世の體ミハ甚殊なり記もやこをいしり名もえり西行  
のゆゑれい遊女の善賢トクきき後よありし也江口之地名也愛

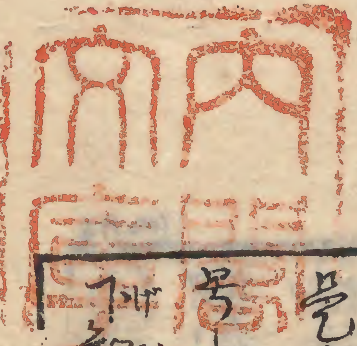
と其好子女の名をへて大江以言の見遊女詩序一篇本朝文粹  
 第九より一もずらりしれは好色のものぞくはを愛と好のほよ  
 近づくやの語あり。好子女を昔より老をまで肩と描しよ。今案  
 案よりよりものしく肩のいさばいむりくも老よりうらね。さ  
 肩つらふゆと秦の宮中より八字肩を漢の文帝の時よりいれ  
 り青黛眉。愁眉啼粧等の眉のつら方行まり。事物紀原等よ  
 りなり。頼朝の時志水冠者と遊女別當とされに東鑑の也  
 新田義貞の臣越前は合部の城あり。阿倍守の神といは遊女を  
 好よのそと宮の仲よのまれ粧を平紀よる。女。願城と  
 号ふものごとく。後の事と見たり。

○傀儡と木偶戯なりと註し。今人形舞あり。され史記殷本紀  
 正義より土木為人対象於人形也。是より人形もよぶをへ。物ま  
 和歌の題は傀儡とて。そのまは好子女のものと傀儡を好子女  
 や。是て人形舞の事なり。まは好子女のまは好子女なり。まは  
 好子女は西宮より人形舞の世をまは好子女のまは好子女なり。ま  
 は好子女より。物まは好子女なり。まは好子女なり。

○予少ア。附神明憑託し。し書。二。と著叔父のく。侍り。坂口幸因  
 好よ。ま。を。ま。日。近。年。の。神。学。者。の。感。し。を。開。く。と。ら。其。志。を  
 叱。り。さ。る。ま。あ。れ。競。角。の。情。書。の。れ。も。て。ま。あ。れ。な。り。字。句。を。し。て  
 おのづか。貧。を。へ。と。れ。才。子。富。を。化。貧。子。貧。く。貧。子。富。を。才。子。富。を。ハ

古今の色俗明り。古は財の字扁旁と意備する人も稀なり。古は  
んがよふははらうとくを諺にるあつめり。古書と讀で樂ん  
一人と競率なり。以終は窮の窮を求ふ。ねをり。古は  
和容字と好。醫は長。有馬温泉の道は強。今わら。予は  
貧しく。貧ははらうとく。学問。疑とひら。癡や。叔父の嘉  
言はひ。出さるら。あは。近世の神学。若。語。諺。多。をい。ん。

○寛永十年八月三日。朔の如。水樂通寶。い。は。錢。と。多。く。積。ま。り。  
是より。慶長より。多。く。す。て。二。百。年。餘。水。樂。錢。直。貴。く。他。の。錢。と。要。錢。と  
号。す。て。年。を。下。り。永。永。西。淺。の。撰。り。夫。文。九。年。相。摸。岡。北。條。家。より  
下。り。永。永。淺。の。お。八。月。で。し。は。あ。は。い。ち。は。八。初。是。も。あ。い。へ。く。す。り。て



五七

他。錢。と。上。方。の。や。一。箇。也。の。法。心。む。り。よ。あ。い。一。豊。臣。家。の。時。又。永。永。錢。と  
他。錢。す。一。つ。は。他。錢。は。あ。つ。と。永。永。錢。一。つ。あ。て。り。慶。長。十。年。十。二  
月。八。日。永。樂。淺。五。兩。と。林。が。り。慶。長。通。寶。の。錢。と。法。を。あ。ひ。  
其。後。寛。永。三。年。よ。寛。永。通。寶。の。錢。と。行。き。一。り。は。通。紀。と。あ。り。一。  
天。野。氏。法。師。の。り。書。よ。の。を。り。彼。書。お。よ。そ。百。卷。よ。う。む。杜。撰。の。り。あ。り。一。  
あ。も。あ。い。ね。世。の。ま。ま。も。な。ら。ぶ。と。も。亦。多。く。天。野。氏。を。尾。張。の。ま。ま  
と。博。達。好。事。の。一。人。の。り。

○古。来。と。髪。髮。悉。判。と。僧。形。の。り。日本。書。紀。古。人。大。兄。皇。子。誦。於。法。興  
寺。佛。殿。與。塔。間。剔。除。髮。被。著。裝。裳。と。名。同。紀。天。武。天。皇。の。り。大。海  
皇。子。と。東。宮。の。り。天。智。天。皇。の。り。髪。と。剃。ぎ。ん。と。剃。除。髮。被。著。と。あ。り。て。

六四

ひげうくと訓トリ。因果経曰過去諸佛為成就無上菩提故捨飾好剃髮鬚髮下略云。抑ふ今世の僧信を售んやあやうげと。髮鬚のどく。僧鼻より下を俗髻と云。賴政の射れ。徳と云。形の定ぬ。おのゝと。髪もけせり。類もそのゆゑ入らざり。

七元 ○戸令をえり男子を十五以上女子を十二以上をれ。婚儀を聽と。り。昔吾日本古法にて異邦の定と別あり。上古を始り女の男のあはゆるみくをなくだ。ひの媒介をて。後女の方男ゆきて。婚をその後と。くま。あ。め。せ。え。り。故は舊記古式は。婚入の式を。足。比。誓。取。と。作。法。と。き。く。見。り。○江家次第卷二十は。誓取。次。身。と。き。り。と。曰。誓。公。來。中。界。入。自。中。門。登。自。寢。殿。腋。階。水。取。入。下。

階執事。件皆舅姑相共懷卧之。云。誓の是の。ゆ。根。よ。と。女。の。父。母。其。履。と。い。と。と。の。と。誓。方。より。と。一。は。り。一。胎。婦。と。云。方。より。途。よ。出。一。胎。婦。と。火。と。ひ。ら。よ。合。せ。く。夜。所。の。於。結。よ。り。三。日。清。む。等。の。灰。実。を。と。り。是。源。氏。の。葵。土。の。方。へ。出。せ。を。あ。お。せ。ひ。合。ん。べ。し。あ。と。ひ。女。の。方。より。盃。と。と。し。喜。を。さ。な。れ。を。う。古。れ。も。所。傳。あ。る。の。ゆ。ゆ。中。古。以。後。と。い。へ。と。初。より。夫。の。方。へ。ゆ。く。盃。古。例。の。り。て。女。の。方。より。し。ら。よ。り。て。吳。侯。は。ゆ。ぐ。よ。れ。と。れ。ぬ。舊。儀。は。よ。く。と。と。が。あ。る。と。い。へ。り。

○び。と。ま。ま。と。い。は。ら。内。女。と。誓。と。結。び。ま。と。も。ら。う。と。い。は。ら。髪。あ。げ。と。い。は。ら。の。ふ。き。ん。伊。勢。か。ゆ。佐。よ。井。筒。の。女。と。業。平。の。の。と。と。と。と。と。と。

うらなうりありけ髪も肩にお君をさげとてあわくさげら  
 うも知る萬葉集十六古一首作者未詳とて橋本寺の長  
 屋よりの糸一うらひつり髪上つらん。けらも定まらま持ぬ  
 んうのえあり。元恭天皇七年紀曰皇后聞之恨曰毒物自結髪  
 陪於後宮既經多年。是も結髪友の二字と以入内のみしあり  
 文選古詩 蘇子卿結髮友為夫妻。李善曰結髮始成人也。髪ハ  
 いまも髪を結ぶらうららる。

元九

○淮南子主術篇小審於毫釐之計者必遺天地之數不失  
 小物之選者惑於大事之舉猶狸之不可使搏虎牛之不可使捕  
 鼠とてと識は宜あらね大行の功あらざる人と細事よる小事

よ心ある人を大用ぬらて其つがあらす武送ふまげも人よ  
 秤量とやう鋪あさあひさせてい影人とて用よる一毫と  
 あとよ商賈とて小政とてその小鮮とまふ。度々あせう  
 て撥せしむが如く。民人共細密なるより一び。とて主君よ人の  
 其臣と使よ。虎よ虎の尻を命ト。猫よ猫の尻とるさうやして  
 あん各其職其任ありて。改其處をゆ。虎よ虎と捕及と命ト。  
 鳥よ水入をさすの尻より。虎よ虎と尻とぬらぬ。不足の情常  
 小慍く鳥よ心とよらうとて。物のみぬぬらう。尻よお怒りの  
 ぶあもああり。学者と学問よのとあありて。利をさうらる。多く  
 貧ようらうと。天と以後世のあらぬらと。物よ類にけ利よさうして

其は學問を好む眼より見るが如く。學者ありて利なきは富くふ  
にあり。諂諛家は同く。

十三

○孔子家語に。與善人居如入芝蘭之室久而不聞其香。即與之化  
矣。との語あり。此れをかりて。平旦の交友を選ばざるは。じつもの  
心くさるる如し。一夜盜擄。奕の流は。交りて。たのれ。是は。潔  
かれ。何の害あるんぞ。不正の友も。交りて。人あり。五六十年も。立てて  
その詞を。うち。打の常語。よなき。勝。負。天は。ゆせて。奇巧。又。ねを。道  
め。と。む。び。く。び。ね。を。人。も。捨。棄。し。よ。もの。も。あ。り。の。教。あり。と。ん  
く。う。り。て。え。勝。む。な。も。う。く。ゆ。り。ね。れ。ど。も。う。ん。と。い。ひ。後。々。大。擄  
奕。打。と。ぬ。く。古。ゆ。よ。せ。つ。て。う。り。自。然。と。な。れ。や。と。い。ひ。ぬ。く。ぬ。ぬ。

一七

と。知。て。ら。ら。ん。ぐ。人。を。く。け。き。た。擄。奕。の。人。も。ま。ど。ら。る。も。あ。る。べ。し。  
一。擄。二。擄。も。あ。る。万。今。も。同。心。け。り。む。ら。と。好。人。々。盜。賊。と。い。ふ。べ  
し。よ。ん。そ。交。と。絶。ぐ。況。や。學。問。と。ん。と。思。ふ。人。は。い。ら。ね。れ。を。學。問。々  
決。して。成。物。と。ぬ。もの。如。り。解。と。ら。る。人。も。その。法。と。あ。る。を。教。べ。く  
ら。ば。教。て。も。益。た。ら。る。べ。し。

○呂氏春秋の意と。擄で目人として。方は迷感。や。い。つ。も。必。如。の  
お。州。ち。もの。お。り。玉。と。つ。ら。ん。々。む。は。似。ち。る。石。よ。す。と。い。ひ。ど。り。あ。げ。て。お  
よ。あ。ら。ち。ぬ。その。功。と。ひ。き。く。さ。と。愛。ふ。勝。主。と。い。た。擄。奕。の。し。て  
辨。く。物。理。よ。る。道。達。や。振。り。て。突。々。た。も。た。き。と。愛。ふ。を。れ。ゆ。め  
を。立。主。々。智。あ。る。ふ。似。亡。の。長。々。忠。臣。は。満。々。もの。如。く。あ。る。を。



其似ちよほむと歙と矯して信と信どろん聖人慮と加ふ所  
 なるしぞぐの如くち—呂氏イニ不帝フアも亦似るものにて秦王と惑ハバ  
 せしと呵々

三飛

○仲丘紫の朱と奪とてめくほきし紫のりぞの他らもの此の  
 りめれも今の紫とていわゆる今の紫と紫根と字知とせり付てそ  
 ひちゆ古今相分其も。しよその根より衣とよむるあわ。古の  
 紫と茜根とをいしてさほぐあをせあわしてほるんあうくとあや  
 色もて朱は似ちりる奪の語あり。仁山金氏紫と聞色なりと  
 いふ朱註より。四淵の聞色と註して論語大全よのちを。子よ  
 わそそ信と信。階より紫を朝服とせり。茜根の紫りり。延喜或ふ

んくろ紫のそわ方やくわぐー。あよ東山九大臣實野公の名目抄  
 紫端の豊カタミのりすと赤端世俗アカハシトロゾクニイフ之此事飲と註しあり。後世女服のこ  
 りよそわ成は紫草サウ染ぬ似るんと茜根ヒヨ染ぬむらゆ色なること  
 まぎらりくあよと茜根ヒヨあよわびとていど朱ヒヨよまぎらのそまわ  
 んや紫の字もよきりり出ら字よて紫サウ字より出ら字やあやヒヨ鄭聲  
 の雅楽ガクよまぎひてととみどり。利リの忠言チウゲンよ似る邦家クワカとみり。似て真マコト  
 ちろととよくしよあびや。今の律乃若めら中臣ナカノミ祓とよめ肩カカ  
 ゆふたととよくわめて常装トコゾウぬめりしゆをけ。或と又去根清淨キヨウジヨウ後とて  
 はつ舟經のは師功德品シフツキョクの聞香の段と圓覚經の清淨部キヨウジヨウとみ令を  
 妄マダカ他ヒち文と盟メイ神カミるに似るゆりゆより紫のちと奪とりり

三

々其一き

○方言郷音といふものありども字はくは和訓の例よりて  
 一書あり。吾大日本より希もを梵語と皆を天竺國の方言なり。  
 それを漢文よ譯して經論と仕きちるも。亦是漢土の方言なり。吾  
 大日本の人々は國の語と本語よき。他の萬國の語とよのめく。  
 方録と見るべし。同一國の内ふても。さへは皆その方録ありて。京  
 の録とよき。肥前國佐賀の方録。四古京田志多加以京田  
 登智京田壽保年 ○尾張國方録京田 祭波大京田の類法はよあり。音の  
 よして字を我なり。漢土の人々其國の文字めてさくると主とす  
 彼より希もを。吾國の語とも日本の方録とくべし。吾國よ存て家

四

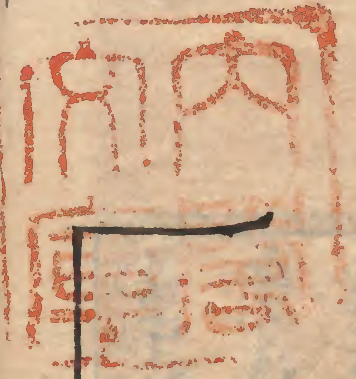
要の常漢を主とす。漢字と主とんは。吾國の罪人たる  
 び。漢土とも。其君顔文字と造り始むらぬ。音のよを保つ  
 ち。ちるべし。漢土をよとて。天地開闢より文字ありよあり。漢國  
 の方録を。登壇必究。武備志なきあり。考ふるべし。

○平安城の人々言結よ訛謬なり。平安城を訛るを。武備志  
 をよよき。東南西北方角よ。池よ。大は訛る。成をとい  
 ち。ちる。十五云。其の時或學者よ同一を。人の考聲を水よりりて  
 か。其の同流の水とのめ。音も亦等し。都々其の清濁の中を  
 けらぬ。是を能て。有とひ。訛るを。考る。今按る  
 子神武天皇以後。い。大和や都をよ。山崎。部をよ。の

何れ大和を以音聲の中和をゆりて之のてまをたし大和を  
 ちめてあし倭歌とてし。鄙土のちを訛るより甲斐文をさるる  
 ちをて書すのりけのをり。之の訛るをわらざる天余於彼はあり。  
 てまをてハ漢文をてし馬哉乎也の助語とてるべし。置まじきことな  
 玉置るをよよをいふ。其文よをてまをてまをてまをてまをて  
 ぢのちの人を自れをてふをを善く訛らぬを水のまをてりてを  
 ぢるるあり。その子ゆり大和を山嶽を遷るる後いばあま珠の  
 人のこと。大日本國の正音とてぬ。今のちわを還て訛る訛るの  
 こをよもせし訛るる水のまをてまをてあし。京々大日本六十四國及二島  
 のち。都々の地ちるを諸の人の音聲を合してゆづりまの自れと

其中とゆりたり。一國一邑をてぬ。他國の人もあれたゆりあり  
 ちるはよおるるの必浪の音をるる平聲よかより入聲よをぬ。  
 あし法士の人の入るるをてぬ。行訛るものより。平安城を桓武  
 天皇以後おるる千年の都舎たる法士の音聲を合熟し。何れ  
 あくも都舎二百年以上よおるる。又くの如くをるる。南都古の  
 吳國をて荆南をちん。都舎の地をちりたり。漢土の諸國を  
 正音の國をてぬ。をて水まをてり。都舎よりををぬべし。  
 ○書經を堯の徳とあつるよ。平草百姓ありて註よ百姓百官と首  
 官の人。種々の姓氏ありあり。古の百姓を土民の稱あり。土  
 土民々黎民庶人の号あり。とて古の稱あり。今自れあり。

殊ちるる多し。今と以古イミと説トク。古を以今を釋トク。類レのレ測レを  
 誤トクるレサクしレべク。古コ今イミ人情ニヒヤウのレちレちレ方レものレ。利リと色イロは在ア  
 の。



*[Faint, mostly illegible handwritten text in a vertical column, possibly bleed-through from the reverse side.]*

*[The left page of the manuscript is mostly blank, showing the texture and color of the aged paper.]*

